

パフォーマンスティとしか呼べないような行為

田端〔以下 田〕糸賀一雄記念賞音楽祭（以下、音楽祭）のステージに出演する方の多くは知的障害や身体障害がある方です。お二人が、障害がある人の身体表現に出会ったのはこの音楽祭が初めてだったのでしょうか？

小室〔以下 小〕一緒にパフォーマンスをするような濃密な出会いは、この音楽祭が最初と言ってもいいと思います。でも、障害がある人たちとの密な出会いは、それ以前の「しからきから吹いてくる風」（1990、製作…シグロ、音楽…小室等）で信楽青年寮に出入りしていた頃。信楽青年寮には土を捏ねたり、絵を描いたりしている人たちがいました。そういった彼らの行為そのものが、僕らの常識とは全く違う角度でなされていて、無責任に言っちゃうと、それらはパフォーマンスとしか呼べないような「行為」でした。そういう面白さには、すでに出会っていましたね。

田 身体表現を目の当たりにする濃厚な出会いは音楽祭だけでなく、過去を振り返るとそれに類するような場面には、既に出会っておられたんですね。坂田さんはいかがですか？

坂田〔以下 坂〕はつきりした出会いとしては、音楽祭でしたね。いわゆる障害のある人たちと接したのは、子どもの頃です。親父が運送業をやっていて、近所に住んでいる知的障害のある子を雇っていたのね。その彼らが、いつも家の中において、うちにあったオルガンをバカスカ弾くんだけけど、それがものすごくうまかったんだよ。

田 その方々はどんな仕事をされていたんですか？

坂 親父の補助みたいなことでした。そういうことがあったから、わりと身近に接していたんだよ。昔は生活していく

以下、ナビゲーター）や施設の職員さんたちとのやりとりによって生まれている場。コラボレーションですよ。

坂 僕にとっても非常に新鮮でした。ワークショップに参加して、出演もしている障害のある人たちもすごいけど、共にやっているナビゲーターの人たちもすごい。周りで支える環境がなければ、やりたくたって出来ないからね。障害がある人たちが音楽祭に出るには、それを実現するための環境づくりも大事で、それをみんなが支えている。それぞれのチームで特色があるしね。

小 最初はナビゲーターという呼び方に少し違和感があったけど…。ナビゲーターは指導者じゃないんだよね。同行者であり、発見者。ナビゲーターのみなさんと折々に話をすると、最初は指導者というか、教育者というかそういった角度から入っていたそうです。けれども、やっていく中ですぐにそうじゃないと気付いたと。そこで、それぞれ自分の付き合い方を発見していこう、まずは寄り添っていくというふうになった。「指導者ではない」ということがすごく大事。

人間同士、本気で対峙する

田 印象に残っているのが、第十二回の坂田さんと湖南ワークショップの筈井正和さんの二人のやりとりです。すごい迫力で、釘付けになりました。

坂 筈井くんなんかやるとガチンコで、ゴリラの親分とヤクザの親分の対決みたいになる。そういう風に、きちんと本気で付き合わないと自分も面白くないし、向こうも面白くないと思う。彼らに手加減されていると思われたくない

LOOK AT ME !! わたしをみて

糸賀一雄記念賞第十五回音楽祭 記念対談

フォークシンガー 小室 等 × 坂田 明 サックス、クラリネット奏者

聞き手：田端 一恵（社会福祉法人グロー〔GLOW〕～生きることが光になる～）

障害がある人、支援をする人、プロのミュージシャンやダンサーなど様々な人が共にステージへあがる

糸賀一雄記念賞音楽祭。本番だけでなく、ワークショップの現場も積み重ねて現在に至ります。

プロのミュージシャンである小室等さん、坂田明さんにこの音楽祭を通して感じたこと、考えたことを語っていただきました。

ために必要な色んなことをほとんど全部人間の手でやっていたから、目で見て覚えられることがたくさんあった。そうやって見よう見まねで覚えられることは、知的障害があってもできたんです。うちは田舎だったから、例えば、秋になると地元の人で親子でポン菓子売りに来るんですよ。知的障害の子どもを連れた父親が大きな機械を持って来て、ポーンとやっていました。

小 巷の中にそれぞれの役割があったのね。

坂 ちゃんとね。どんな人にも、社会の中に何かしら出来ることがあった。僕も、生きるために必要なことはだいたい全部出来たわけです。学校も、いわゆる特別学級とかはまだなかったの、みんな同じクラスと一緒に勉強したり遊んだりすることがごく普通でしたね。

田 小さい頃から当たり前に一緒にいらつした。小室さんの子どもの頃はどうか？

小 僕は東京の荒川区にいて、程度の差によっては家の中に閉じ込めておこうというようなことも少し存在したかな。あまり人様の前に出さないようにみたい。

坂 僕らのところも、出られない人たちはいたよ。

支える環境があるからこそ出来ること

田 実際に、音楽祭に関わるようになってどのような印象を受けましたか？お二人とも、本番のステージだけでなく、ワークショップの現場にも足を運ばれていますよね。

小 音楽祭は非常に新鮮な出会いでした。こは、障害がある人たちの表現を彼らだけで発表する場ではなくて、ワークショップナビゲーター（第十五回からプロデューサー）

じゃない。俺も手加減なんかしたくないわけだよ。本気で対峙してないとバレちゃう。

小 あれは面白かったよね。坂田さんが来るまで筈井さんは安泰だったの。ところが、筈井さんにとって坂田明の登場は「俺を脅かす者が現れた」という状況だったから、すごく怖かったんだと思うよ。

坂 そうでしょうね。彼は自分の群れを一生懸命守っている態度だった。俺はすごく面白かったね。

小 例えばその二人を客席から見ていると、それ自体がパフォーマンスとして見えてくるよね。

田 今の話は、筈井さんという一人の出演者についてでしたが、音楽祭に限らず様々な場面で「障害のある人」というふうに一括り、固まりとして語られることが多いと感じます。本当は一人ひとりなのに。お二人は音楽祭の中で、最初から個が見えていたんですか？

小 僕の場合、最初は個です。まず目立つ人に目がいった。その後、最初は目立っていないように感じていた人たちの表現していることが、一つひとつ見えてくるようになったんですよ。今では、目立っているかどうかは関係なくなりました。

坂 やっぱ目立つ人が目にいった。で、誰がナビゲーターなのか、支援員なのか、障害がある人なのかよく分からなかったりもするんだよね。よく考えてみたら、僕らみたいな仕事をしている人間は誰が障害者で健常者なのかはつきり言えない。音楽祭でも、明確に線を引くんじゃなくて、僕ら自身も障害者であることを認めつつ、障害のある人たちと同じように一緒にやるんだよ。

ここでもしか得られない喜びがある

坂 英ちゃん(湖南ワークシヨップ後村英治さん)も不思議な存在で非常に面白い。何をするか分からないから、近づいてきたら楽器を触らせないように「来るな！」って目で言うの。そういうこともやりとりだから。

小 もちろんミュージシャンにとって楽器は大事だから心配もある。でもその心配は、表現にとつては不必要だし、不純な心配なの。だから、坂田明だつて「来るな」ってやってる時には後ろめたくもある。そういう関係も面白いんだよね。でも、それよりも圧倒的にパフォーマンスしていることの喜び、あそこでもしか得られない喜びが各ミュージシャンにはきつとあると思う。

坂 プロのミュージシャンとか言ってるけど、俺らの想像なんて別に大したことないと思う。それをはるかに超えて存在している人たちがいて、その人たちは自分と同じ生きていく人間なの。しかも、同じステージ上で僕らの予測が付かない行動をする。そんな場に出会うチャンスは他にないです。

小 喜びを感じる一方で、僕はこの音楽祭の素晴らしさや出演する一人ひとりの素晴らしさを語る時に、不安になることがあるんですよ。もしかすると、自分は障害がある人だから持ち上げようとして言ってるんじゃないかと。坂田さんはどんな風に感じますか？

坂 日本人だろうが、外国人だろうが、障害者であろうが関係ない。俺たちは音で勝負しているから、基本的には言葉じゃなくて音とか態度とか、雰囲気とかを使っている。音でしか表現出来ないから。その意味においては、誰の表現

するように指示を出しました。でもね、やっぱりオフすることに後ろめたさを感じちゃう。

坂 確かに後ろめたい。でもそれがギリギリのところなんだよ。どう折り合いを付けるかっていうことに尽きると思うんですよ。

見守り、見守られる社会の見本

小 でもこの音楽祭においては、できる限り頭ごなしにダメつて言わずにやろうという意識が、スタッフにも培われていると思います。理解しきれない自分がいながらも、対等であらうというかね。

田 そう思うと、後村さんは音響の人ともコミュニケーションをしているんですね。きつと、舞台監督の西田さんも彼をマークしているでしょうね。

小 ある種コラボしている。

坂 してるんですよ。
小 今、マークするって言ったけど、マークしているということとは見守っているということ、見守るというのは大事なことです。世の中には、ある種のお節介も含めて、見守る体制が必要で、相模原の事件が起こった要因の一つには、見守られていなかったことがあるのかもしれないと思う。見守られている、見守っている世の中の一員だと思えることで、普通にしていられる。音楽祭の舞台の上には、その見本のような状況があると思う。でも、施設に帰るとなかなかこうはいかないという声もある。本当はこの音楽祭のよいうに世の中があつたらいいと思うよね。生まれてきたからにはみんな楽しく生きる権利があるんだから。



坂田 明 Akira SAKATA

1945年広島県呉市生まれ。広島大学水畜産学部水産学科卒業。1969年上京、1972年から1980年まで山下洋輔トリオのメンバーとして活動。1981年からは様々なグループの結成、解体を繰り返しながら音楽シーンの最前線进行。ミジンコ研究でも知られ、その集大成として2013年春に「私説 ミジンコ大全」(晶文社)を刊行した。糸賀一雄記念賞音楽祭には、第十二回、第十四回にゲストミュージシャンとして参加。



小室 等 Hitoshi KOMURO

1943年東京生まれ。フォークシンガーとしての活動とともに、テレビドラマ、ドキュメンタリー作品への音楽提供や、ナレーションなど、多様な分野で活躍を続ける。1980年代後半から信楽青年寮を訪れるようになり、以降も長年にわたり滋賀での活動を続けている。糸賀一雄記念賞音楽祭には第十一回から総合プロデューサーとして参加。糸賀一雄生誕100年を記念して制作された「ほほえむちから」の作曲を担当した。

も同じで、言語が通じなくても勘でやってる。

小 ここに集結したプロのミュージシャンたちは、出会い頭に話し合う音に、とっさに対応しようとする音楽をやっている。瞬時に反応するから、勘でいくんだけど。でもその勘には根拠があつて、その人の歴史と無縁じゃない。音楽祭の出演者にもそれぞれに生きてきた歴史があるから、それを根拠にして瞬時にパフォーマンスが発せられる。セオリーだけに頼っていたら、プロのミュージシャンでもあの人たちに対して拮抗するパフォーマンスはできないと思うよ。

坂 単に出合い頭で、条件反射の積み重ねなんだよね。

小 音楽祭に参加したプロのミュージシャンたちは、障害のあるなしに関係なく音で仕掛けていく。それに対して、あの人たちは金縛り状態に陥らないのよ。そういうことってなかなか出来ないことだと思ってるんですよ。

坂 固まる人が多いだろうね。金縛りも一つの反応だから。その中で、音楽祭に出ているあの子たちは、やっぱり固まらない。

小 刺激し合うんだろ。固まっている人の中に、固まらない人がいると、他に伝播していくんだよ。

坂 それこそ、英ちゃんの動きですよ。雲をつかむようにふうと消える。彼なりにガチンコでやろうとしているけど、ドンと構えるのとは違う方法で勝ちに出るんだよね。これは相当刺激的ですよ。

小 ふうつとフェイドアウトするんだよ。

坂 もうね、こつちにガチつと力を入れさせないんだよ。

小 あるとき英ちゃんが、全部のマイクに一つひとつ声を出していこうとして、それに気づいた音響スタッフがマイクをオフしていくっていう戦いがあつて。その時は、僕もオフ

坂 最終的には、一般大衆の常識が障害のある人たちに対してもつときちゃんと寄り添って、ともに生きているんだということが表現できるようなやさしい社会が望ましいですよ。今は老人にも、病人にも、誰にも冷たくて色んな面で人間の温かみが伝わりにくい社会になっているから。

田 いろんな仕組みやシステムが細分化されて、出会う機会がなくなる。接し方が分からないから、下手に関わってはいけないと思う。無関心ではないけれど、無関心のような態度になってしまふのかなと。音楽祭の場は、なぜ抑制するでもなく、過度にこうしなさいということでもなく成り立つのでしょうね。

坂 折り合いのつくギリギリの点を毎回見出しながらやっているからだろうね。そうやってお互いに、共に生きていくしかないんだよ。人間社会である以上、障害者がいない社会はないわけだから。障害がある人があつてこそ、我々もいられる。みんなが小さい頃からそういう認識になっていく社会っていうものが、今はないから。全部疎外されていって、健常者であっても疎外感を感じる。そういう温かい、やさしい社会でないところが一番大きな問題だと。社会のひずみというものは、システムのひずみだから。

小 システムを管理しているのが政治であり、行政であり、官僚であり。そういう人たちがもつとよくしたいと思つていても、与えられた持ち駒の中でしか物事を考えない。手駒の中で考えている限り、手駒の中でしかできないじゃない。音楽祭のパフォーマンスと逆で、想定のもののがきたら到底受け入れられずにはじかれちゃいますよね。

坂 レギュレーションの外ですよ。書類書き直してきなさい、となつちゃうから。

能動的に「自分を見て！」と発信している

小 もしこの音楽祭がね、少しでもいいなと思えるようなことがあるとして、それを見た人たちが「うちの町でもあったほうがいいな」なんてやらないんだよ」っていう声が上がるのが手駒じゃない側の声ですよね。そういう声をどんどんキャッチして、フィードバックできたらいいと思うね。

田 一昨年くらいの音楽祭の時のアンケートに「これは岐阜でもやることに決めました」と書いている人がいました。まだ実現はしていないようですが。

小 メンバーの人たちはみんなどう感じているんだろうね。関係者に聞くと、みんな楽しくて、来たいから来てますと言うけど。

坂 今の社会で、自分が大勢のお客さんの前で何か出来ることはすごいことだっというのは、おそらく分かっているよね。

小 ステージに立つことね。

坂 いい日常なんですよ。ステージに立つと、別人になっているよね。ステージにいるときは、どんなに障害があっても何か発しているから、意志というものが一人ひとり出てる。オーラみたいなもの。

田 ステージ上での見守られ方は、日常生活における見守られ方よりもずっと引いた感じ。自分に裁量があつて、自分が主体であるときより感じられるのかもしれないですね。

小 全員が客席に向かって「私を見て！」って思ってる。中には特定の人に向けている人もいるんだけど。人は誰であれ自分を見てもらいたいんだよね。潜在意識の上で表す人であれば、表せない人もいたりするけど。見てもらっているかもしれない、と思っているからやっていけるんだよ。受け



身じゃなくて能動的に「私を見て！」ということが何かをやらせているよね。

坂 僕らでも同じ。あれだけの人間がいるところでなんかやる。みんな人に見られて楽しいんだよ。「自分を見て！」ってみんな思ってる。

小 一人ひとりが「見て！」と発信していることが分かって見るとね、それぞれの瞬間の表現がね、みんないいんだよ。

坂 いいよね。

小 誰一人ね、投げやりになっていない。舞台の上で。

坂 そうだね。適当にやってない、一生懸命だよ。

小 そうすると表情も動きも輝いて見える。一人ずつ写真を撮ったら、全部いいのが撮れると思うよ。

坂 役割分担なんだよね。一人ひとりがその役割を感じているから「見て！」っていう思いになるんだよ。

田 意識的に感じているかどうかは別として、どうやって役割を感じているんでしょうか。

坂 基本的には生きる力だと思う。例えば、田舎へ行って、薪を取ってきて、火を起こして、ご飯を炊いて、食べるものを採ってきて、雨宿りするところ作って……と考えると、いろんな人が役割分担をして、共同作業でやっていかないと生きていけない。その時に、今の音楽祭のステージのように、一人ひとりが、自分は何ができるかを誰かに見てもらいたい。俺はこれをやった、こういうことができるんだということを表現したいわけです。そのことによって、みんなが共同社会の中で存在を認めながら、楽しく豊かな時間が過ぎていくと思うんだよね。

田 ステージ上にはそういう世界が保たれているということなんですね。

坂 相当素晴らしい世界がステージの上にあるわけですよ。歌を歌ったりサクスを吹いたりすることは、自分の魂を揺らすことなんだよ。自分の魂が揺れて、それが音によって相手に伝播して、相手の魂もゆらす。その時に巨大なエネルギーが出る。とにかく感じれば、聞いている方も演奏している方もみんな楽しいと思うよ。あとは、やっぱり発信しないとダメだよ。

小 無理やりつなげるみたいだけど、やっぱり「私を見て！」なんだよ。

坂 自分がやっていることは声とか音とか低周波ののだけど、それを高周波にして電波でボンと飛ばしちゃう。それは、外に向けて自分がオープンになっているっていうことなんだよね。

小 坂田明のレバートリーに、ミジンコに関連づけたタイトルで「look at me」というのがあるけど、それは哲学としての「look at me」なんだと思うよ。

田 「私を見て」ということですね。

坂 あらゆる人間がそうだと思う。注目してもらいたい。

音楽祭は気配だらけ

田 今までの話を聞いていくと、とても愚問だと思うのですが、音楽祭で繰り広げられていることを何と呼べばいいでしょうか。

坂 敢えて言えばセッションですよ。でも音楽祭でいいんじゃない。例えば、アール・ブリュット、エイブルアート、アウトサイダー・アートとか色々あつて、「これは、アール・ブリュットか」と決めると自分の中で整理がついてそこで完



結しちゃう。整理するには名前が必要かもしれないけど、実際に起こっていることは、むしろ整理されたくないようなことじゃないですか。音楽祭のワークショップの延長線上にあることを一つの枠でくくることはできないじゃない。

小 今ふと思いついたけど、気配みたいなもの。セッションも気配をお互いにキャッチしあうことで成立するし。でも今はイヤホンで耳を閉ざしたり、日常で感じる気配が減っている。ところが、音楽祭は気配だらけですよ。みんなが気配を出し合っている。本当は気配をキャッチするところから物事は始まるし、その気配をキャッチした時の喜びに勝るものはないと思うよ。

坂 なんだか分からないものを、なんだか分からないという不安になっちゃう。でも、気配では分かっているけど、具体的に言葉で説明できない。それでいいと思うんだよ。この音楽祭は、今年も訳が分からないことが起こって楽しかったですという感想でいいんじゃないか。

小 また来年も来たいね、とか思いながら帰ってくれたらいいよね。

田 音楽祭の後の打ち上げの場面でゲストミュージシャンの方々が、その日の出演者一人ひとりについて、熱く語っているんですね。今日この場や、打ち上げでのお話を支援者にも届けたいと感じました。聞いてもらうことで、支援する側とされる側という固定観念や、支援の方法に何らかの影響を与えるかもしれない。そういうお話ばかりでした。ありがとうございます。